

幼児の自己發達

東京高等師範學校講師

丸 山 良 一一

兒童は生れながらにして自己發達的である。自己を保存し自己を發展させる性質は、兒童が天賦的に内具するところである。而もこの内的性質は外界からの刺戟がなくては實現されない。

身體にしても成長するさいふ性質は兒童が天賦的にもつて生まれるのである。併し外部から榮養や溫度や日光を與へなかつたならば、身體は成長しない。外的刺戟さへあれば、または外的刺戟さへよければ、よく成長するかさいふに決して然うではない。嬰兒に牛肉や大豆や御飯を與へても殆んど消化しないから彼等の成長の助けはならぬ。むしろ時きて害となる。外的刺戟は内的發達に相應しなければならぬ。

精神的の發達に刺戟についても全く同様である。内的要求があるからして、外から與へたものを攝取するのであ

る。嬰兒に對して我々成人が與へてゐる外的刺戟は日々實に數多いのであるが、それが嬰兒の感官を通じて腦裏に納められてゐるものは、極めて少いといつてよい。これは嬰兒の精神發達が漠然とした未分化の状態にあつて、未だ外界の複雑な組織を有する事物や事件を了解するだけに發達してゐないからである。嬰兒が「アア」「ププ」「ウウウ」なさいふ自發的の喃語をいふやうになつてから、始めて我々は「マンマ」「トト」「ハイチ」などの有意味の語を學習させることが出来る。

嬰兒の内的發達を覺醒させるものは、外的刺戟であるが、その覺醒がなければ、外的刺戟は彼等の行動組織の中に攝取されない。即ち意味のあるものにならない。こゝに於て我々は、兒童がよく了解しよく消化しよく攝取しよく組織化するものは、彼等の心身の發達によく適してゐるか

らだき推定して差支へない。かういふ考へから出發して、
 幼兒の好むもの、行ふもの、選ぶものを調べ、その事實事
 件の組織的性質を吟味するならば、兒童の内的發達程度を
 推察し得るであらう。六七歳の幼兒は童話お伽噺を好む。

童話お伽噺はその舞臺さいひ、その登場人物さいひ共に想
 像的のもので、而も事件は急速度に展開して何等現實性を
 帯びて居ない。やはり想像的である。かういふやうな想像
 的のお話を好むは、この頃の兒童の内的發達の特質が想像
 的であるからだき推定するが如きはその一例である。

教育は一面では理想へき導くのであるが、これは同時に
 兒童の内的發達に適應してゐなくては、彼等を眞に導くこ
 こは出来ない。兒童の心理さいふ立場からいへば、兒童の
 心意發達の段階を調べて、その大凡を知つてゐるこまが大
 切である。兒童に自由畫を描かせて、これによつて兒童の
 内部をのぞいてみるこまも出来る。また彼等の話してゐる
 言葉を蒐録して、それからこれを整理してみても發達段階
 を伺ふこまが出来る。また一定の繪畫を觀察させて、これ
 を取り、それから繪について見たこころを述べさせても

これが出来るのである。大きい兒童であるこ圖畫、作文な
 ぎの成績によつてその發達を推知し得るわけである。

かゝる研究に於て、最も大切であつて而も最も困難なこ
 こは、蒐集した材料から、特質を發見するこまである、兒
 童の内部發達に適應する特質を洞察するこまは、餘程修養
 のある人でないこ出来ない。これが出来ればその道の専門
 學者である。併し一度示されしこころを學ぶこまは我々凡
 人でも爲し得る。これを知つて幼兒保育の任に當るこまは
 一つの大切な條件である。

